
超能力は難しい

水城まりな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超能力は難しい

【Nコード】

N3299BA

【作者名】

水城まりな

【あらすじ】

いつも通りの学校、いつも通りの幼馴染み。

平凡な日常を心地よく思っていた俺の前に現れたのは、『いつも通り』の日常には現れてはいけないような美少女だった!?

美少女は自分のことを超能力者だと言い、俺を連れ戻しに来たのだと宣言するが……? ?

プロローグ

「おかえりなさいませ、ご主人様」

学校から家までチャリで二十分。今日は全速力でチャリを漕いだから十五分。

いつもと違うのはその五分だけのはず、だったのに。

「なんだ、これ……？」

俺の目が確かならば。家のリビングに入ると、フリル付きの黒いメイド服に身を包んだ美少女がソファから立ち上がって出迎えてくれた。おかえりなさいませ、なんてお決まりの台詞を言っている割には無表情だけど。

なんだ、これ？ どんな夢だよ。俺ってそんなに欲求不満だったのか？

「これは夢ではありませんよ」

俺が葛藤していると、美少女が一步分だけ俺に近付いた。それに合わせ、俺は一步分だけ美少女から後退る。

あれ？ 俺、今……声に出してたっけ？ それとも夢だからなんでもアリなのか？

肩まで伸びた桃色の髪を持つ美少女は、黙り込んでいる（はずの）俺を見てゆっくりと瞬きをした。

「私はその方と貴殿に帰還していただくために派遣されました」

「き、キカン？」

「ええ、帰還です」

どこに？ 俺の家はここだし……生まれたのもここだから、故郷だ
ってない。

言うつか、こいつは何者だよ？ メイド服を着た役人か？ いやま
さか、夢だからってそんなにぶっ飛んでいないだろう。

「……申し遅れました」

「は？」

どこからツッコんでやるうかと考えていると、美少女が深々と頭を
下げてきた。

「国家直属のA級能力者特別部隊所属、キラ・ユイリと申します。
リアス様には常々お世話になっておりました」

「そ、そうなんですか……」

またツッコむポイントが増えてしまった。

俺ってほとんどゲームしないし、読むのはバスケット漫画ぐらいなんだ
けどな……。なんでこいつはこんなにファンタジーな話をしている
のだろう。

いや、ファンタジーってよりSFに近いのか？ 超能力者とか言っ
てるし。よくわかんねーけど。

「自己紹介は終わりました。……さあ、帰還を」

「ちよっ、ちよちよちよ……！」

謎の美少女 キラ・ユイリが一気に俺との距離を詰めてくる。
なんなんだ、なんなんだ！ 女の子に詰め寄られるなら、こんなに
無表情じゃなくてもっと愛嬌のある子の方がいいんですけど！

確かに美少女だけど……あああああ、意味わかんねー！

プロローグ（後書き）

無表情な美少女と、女の子に夢を見る思春期男子。
初作品です、よろしくお願ひします！

家族

「お……これは……メイド、萌えじゃ……」

「紅葉？」

「わっ！」

いきなり耳元で名前を呼ばれて飛び起きると、紺のスイーツの上にクリーム色のエプロンを付けた姉さんが不思議そうな顔をしてこっちを見ていた。頬にかかった髪を耳にかける仕草が妙に色っぽい。

……って、そうじゃなくて！

「ねっ、姉さん！ あれっ、美少女メイドは？」

「……疲れているの？」

呆れたように溜め息を落とされ、一気に顔に熱が集中したのがわかった。その顔を隠すように頭を抱える。

ああ、わかっていただけ……。

「やっぱり夢だったのか……！」

どうやら俺は、家に帰るなりソファーにダイブして爆睡していたらしい。

恥ずかしくて身悶えていると、台所の方からいい匂いがしてきた。独特な香辛料の匂いがふわりと鼻を刺激し、俺は確信する。

「……カレー？」

「ふふっ、残念でしたあ。今日はただのカレーじゃないのよ」

「えっ？」

顔を上げると、ちょうどカレー皿を二つ持った姉さんが台所から出てきた。にっこり笑った姉さんの手によってテーブルに皿が並べられる。

……どう見てもカレーなんですけど。

「ほら、よく見て。今日は夏野菜カレーです！」

「え？ ……あ！」

確かに姉さんの言う通り、そのカレーにはナスやらカボチャやらが浮いている。

……おいおい。もう秋だっていうのに、この季節感の無さはなんなんだ？

そんな俺の困惑なんて知るわけもなく子どもみたいに無邪気に笑ってみせた姉さんは、「紅葉も座りなさい」と右手をひらひらさせた。腹も減っていることだし、と渋々姉さんの正面に腰かける。

「それより紅葉、今日も部活だったの？」

「ん、まあね。秋の大会が近いし」

俺の名前は高木紅葉。紅葉、と書いてコウハと読む。これは名前を付けてくれた父さんのこだわりだ。

高二になった今でこそからかわれることはなくなっただけ、中学ぐらいまではそりゃもう酷いものだった。

考えてもみてほしい。「紅葉と書いてコウハと読みます」と自己紹介しただけで大爆笑されてしまう俺の心情というものを。

名前も捻くれているんだから本人も捻くれているに違いない、と根も葉もない自分の噂を聞いてしまった時の気持ちを。

負けず嫌いな性格が幸いして本格的なイジメにまで発展したことはなかったけど、俺は一度だけ父さんに聞いたことがある。どうしてこんな妙な読み方の名前を付けたのか、と。

「お父さんな、漢字が苦手だったんだよ」

しかし両目とも金色の目を持つ父さんにそう言われてしまったのは、俺はもうなにも言い返すことができなかった。

父さんの話を信じるならば、イギリス人と日本人のハーフらしい。……ちなみに、俺はイギリスになんて行ったことがないから英語がペラペラ帰国子女ってわけではない。なんか損した気分だよなあ。

「そう言えば紅葉、そろそろ誕生日よね？」

自分の英語の成績を思い出して嫌な気分になっていると、姉さんが不意に口を開いた。

「十七になるんだよね？」

「あ、うん」

「そっか。……早いなあ」

俺が答えたのと同時に、感傷に浸るかのように目を細めた姉さん。その表情を見て何故かドキリとした。

早いな、って。

それは単に俺の成長がってこと？ それとも……。

「母さんの命日も……もうすぐだよな」

「……そうね」

母さんは俺を産んだ直後に死んでしまった。

そもそも俺は未熟児で生まれたそう。今では後遺症もなく大好きなバスケができていくけど、母さんはそうもいかなかった。

母さんの命を優先して俺の命を諦めれば良かったのに。俺の誕生日、その日は同時に母さんの命日となってしまったのだった。

そして、母さんのことをとても愛していた父さんも一年前に姿を消してしまった。外国で死んでしまった、と姉さんから聞いているけど真相はわからない。

「ところで紅葉、なにかほしいものはない？ 一年に一回ぐらいは我が儘聞いてあげるけど」

しんみりした空気を変えるように、姉さんが取って付けたように笑顔を作って尋ねてきた。

一年に一回ぐらい、と言っても。姉さんにはいつも迷惑かけてばかりな気がするなあ。仕事があるのに毎日ご飯作ってくれるし。俺はそれ以外の家事を担当ってことになってるけど、掃除も洗濯もまともにやった試しがない。大学を中退して働いてくれてる姉さんのお陰でちゃんと高校にも行かせてもらってるのに、毎日迷惑をかけてばかりだ。

「……考えとくよ」

「わかった。遠慮しないでよー？」

軽く笑って言う姉さんに思わず嘆息する。

姉さんには敵わないなあ……。今も、きっとこれからも。

「つと、うわ！」
「！」

ぼんやりしていたら、スプーンを握る右手がコップを倒してしまっ
た。

急いでコップを立て直すけど、もう遅い。中に入っていた麦茶がテ
ーブルクロスに染みを作ってしまったている。黄色が濃くなり、嫌な
滲みを残していった。

「ちよつと、大丈夫？ ほら」

「あ、ありが、……っ！」

姉さんから布巾を受け取ったのと手の甲に痛みが走ったのは同時だ
った。

気付けば布巾はテーブルの上に落ちていて。あまりにも一瞬のこと
で、暫くなにが起こったのかわからなかった。

「つと、ごめんなさい……！」

姉さんの悲痛な叫びを受け、いつの間にか凝視していた布巾から目
を離す。視線を合わせると、姉さんは折角のきれいな顔を歪めてし
まっていた。

「ごめん、紅葉！ 痛かったよね、ごめんね……！」

俺の手を必死に擦りながら、姉さんは泣きそうな声で謝罪の言葉を
繰り返す。それを見つつ、俺はどこか他人事のように考えた。

ああ、またか。またあれか。

「いいよ、姉さん。こんなの痛くない」

「だけど、赤くなって……」

「いいから！」

声を荒げると、姉さんがびくりと肩を揺らした。その衝撃で手が離れる。

涙で潤ってしまった大きな目が痛々しく揺れていて、なんだかこっちが悪者になったような気分だ。

「……ごちそうさま。部屋、行くから」

「え、ええ……」

姉さんの暴力が始まったのは、つい最近のことだった。

昔から優しくくて、どんなに怒った時でさえ絶対に手を出さなかった姉さん。そんな姉さんに初めて本気で叩かれ、最初はショックだった。けどその理由がはつきりわかり、俺は以前ほど落ち込んでいない。

そう。姉さんは単純に、俺に触られるのが嫌なのだ。

理由はわからないけど、叩かれるタイミングがわかってからはなるべく姉さんに触れないようにしている。だけど、一緒に暮らしていればそれも限界があつて。

しかも、さっきみたいに些細なことだったら咄嗟に姉さんに触れないように配慮するなんてできないし。

「なんなんだよ、いつたい……」

自分の部屋のベッドに腰かけ、姉さんに叩かれた場所を擦る。

さっきは姉さんがいる手前痛くないと言ったけど、ほんとはまだひりひりしている。当然だ、本気で払いのけられたんだから。

「……」

叩かれた右手を天井に掲げる。指と指の隙き間から部屋の電気が差し込んできて少し眩しい。

だけどそんなことをしても痛みが和らぐわけはなくて、不意に泣きそうになった。

「なんなんだよ……」

きつと、俺が悪い。俺がなにかとんでもないことをしてしまったから、だから姉さんは俺に手を上げるようになったんだ。

もし本当にそうなら最悪なシナリオだ。俺にとっては唯一の肉親だつていうのに、その姉さんに嫌われているなんて。ほんとに、どこかの三流ドラマだよ。

でも、それじゃあどうして姉さんは俺のことを見離さないんだ……？

「わかんねえよ……っ！」

コンタクトを外し、今度こそ本当に寝てしまおうとぎゅっと目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3299ba/>

超能力は難しい

2012年1月9日00時46分発行